

抄録辨書

和装本

ケ 5

44

68





○ 論語

驥を一日千里をりく名馬なり。六の馬を千里をりく力よりもまづ
一通りの不勝る徳を稱す。日なり人もまづ賢人君子の國を治むる
力よりもまづ其人の徳を稱す。可なり。と云。譬云。

○ 同書

孔子魯の定公に仕て大夫となりたまふ。魯國の廐に火ありて
猶らも燒失りたり。孔子毎朝の政をまゝく。役所をりたりたまひて
かの火をゆふ。や怪我人をあがり。と問ひたまひて。馬の怪ある
所。何なり。とあり。この内を何國か。軍ありて。馬を養ふ。の入用
の。ゆふれ。も其馬をりし人。たまふ。大いある。ゆふれは。まづ。怪我
人を。尋ね。たまふ。なり。民百姓を。養へ。て。國を。治む。の。事。あり。と。評

○ 孔子家語

魯の定公ある。孔子の。内。弟子。の。顔淵。に。たづ。ね。たまふ。此。方。の。國。の。

佚事

東野畢といふものゝ馬を使車とせしむるに因りて居るに
秋園といふ車種を有するを居るを以て馬からありて道
おこまやせとせしむるに定て大小の機懸ありて近習のより小君子
ても村々を人のあそびを以てあそびとせしむるに作る車(秋園)
も早速小西前を退きしる夫より二日ふく馬を野飼おひる
彼人々魯の役所へ所へるを東野畢の預りの馬を野原へ道
乃しして二足の驂を以て引く車と引く所へて
定てこれとせしむるに定て此の車を以て
秋園とせしむるに定て此の車を以て
先日夫の東野畢のこゝを以て其馬が途をあらは



りて居るに因りて居るに秋園といふ車種を有するを居るを以て馬からありて道
おこまやせとせしむるに定て大小の機懸ありて近習のより小君子
ても村々を人のあそびを以てあそびとせしむるに作る車(秋園)
も早速小西前を退きしる夫より二日ふく馬を野飼おひる
彼人々魯の役所へ所へるを東野畢の預りの馬を野原へ道
乃しして二足の驂を以て引く車と引く所へて
定てこれとせしむるに定て此の車を以て
秋園とせしむるに定て此の車を以て
先日夫の東野畢のこゝを以て其馬が途をあらは

一定公も成程と感へたまひく誠小史稿より通うては衆の氏を
使ふとも知れく中く小史の事をはきいふを今が一石版活
字のたゞと作れば私割ちく私の中く并りまれば最早
十八ぬち内中鳥を口皆く啄まれ獸を凡く引掻き
人を食とさく作らまは馬をよ新るく道中まれば
てもくてもまふあよのよ力のありたけ使ひまれば
てせむのはまひりまねと定公大小よりこひまひく千後子
げもよ孔子の活一ありれば孔子の内よりよ私割の中と
いふくは私をたれくこひまひ感公の程の事をはこひりま
ねと作られく

○同書

也弟子の子夏孔子の弟子也孔子は私よりけりては
おは易の道十人とも鳥とも獸とも蟲ともかの生れ
るにその教の偶と奇の年とくこひりまてそれく十天からけ
るまひる氣のちうひこひりま一通りの人をそよまねぬ
人の道く通いまたその根本をえくかひりま
天の一番の業まく地二番人々三番てこひりま其三
三と三と九くても其九を九九十して一かひりま
日の位くこひりまひりまひりまひりまひりまひりま
ありまは史史人の十月で生れまひり又九九十して一
八九七十二とあるま二番偶の教く法よりま法の偶

陽の奇子三つひひまるとの史、奇子十二辰を日とり、
十二辰の子三つ、亥まるとの十二を一年の月の数に當り、
月を
法氣の一番く陽氣一番の午を日とり、
馬を十二月とまれば、
下略

○同書

孔子の弟子子の閔子騫魯國の家老の季康子を知り、
刑の費と
乞とつらの代友とあり、
百姓の治め、
孔子の作れ、
徳を以て民を恵み、
法を以て民を教む、
それ徳と法とを以て民を治む、
是具く馬を御する、
小治を以て
と同一とく、
また君を馬の人の人あり、
役人を以て自由とす、
ぬゆ馬の轡あり、
刑と乞を法のた、
人を殺す、
盜賊を以て

○同書

首とまるとの子、
定めぬ馬の策あり、
それ中君の政こと、
徳を以て
く馬の人の公あり、
閔子騫の何と我の何と、
の聖人のま、
つらとを
委し、
けむり、
た、
孔子の作、
た右の天子は
ま、
内史と乞を没、
左右の手、
た、
の徳と法とを以て
た、
の友位あり、
多くの民、
を以て
置を以て
鞭、
た、
民百姓を以て、
使、
の、
馬、
た、
を以て、
それ中
小天下の治め、
馬を以て、
理窟あり、
つ、
た、
何百年、
天下を人、
小、
た、
る、
氣を以て、
あり、
また馬を以て、
小の、
の、
を以て、
を以て、
轡の、
た、
ぬ、
や、
か、
か、
か、
鞭を以て、
た、
馬の、
た、
を以て、
あり、
た、
ぬ、
や、
か、
か、
馬の、
を以て

和するあり民を治むるも法をた拘りて之を理れり
に教しき仕置をされ馬のた手位も之を以て鞭にうり
叩きまて馬も倒れ車もひるも其のたの人も大怪おそ
乃理ありまひ小右の車と曳く四匹の馬と所ふものそれ
手位より之をたてり天下を治むるもの六友とて六組
の守役ありありそれ馬とて其のたの人もあはれ
して手位をとり馬の力を有けりて馬の力を体は是れ
輪のりては曲折ても長途ても自由自在ありあり
聖人のてを治むる道ありと下略

○同書

孔子の宅の飼犬死すとき孔子の子貢小作らる飼てある

馬々死ぬれば惟り包く埋め之犬々死ぬれば蓋り包く埋る之を治り
の犬と埋るは方うかきくすくすははれり惟り蓋り捨るたど
あるひ馬と犬とを埋めるもとあると

○拾遺記

周の穆王天下をめぐりなすひくハその名馬とハ龍と名付くこれあり
あり絶地翻羽奔霄越影踰輝超光騰霧挾翼とあり
秦の始皇帝小名馬七足あり追風白兔躡影追電飛翺銅雀
晨鳧とあり

○古今注

漢の武帝征伐をりぬりて名馬九疋あり浮雲赤電絶群逸驃
紫燕緑耳騏驎駒絶塵とあり

○西京雜記

漢土の西小大宛と云国ありその西小名馬ありて武師城と云所十あり

○晉書

の目もあつたれど常の馬を腹もちつささ中一通りぐんれど
名馬と格別小腹も大きく食らぬもちがた常の馬を食らぬは
わさし出らぬ之を丈夫千里の力有るもその力とをさるふとあるは
そよと鞭を打つるがも厚く叶はぬ飼やうも厚く葉たる馬のさ
ららうと嘶いぐんれども丈夫を知らぬとさうや高慢さう鞭を
打つ馬をさるぐ天下の名馬ありとさう居れども謙下名馬はさ
まら名馬とあれどもそれを知らぬとさうやそれの中の賢人を名馬
とさう思はるる君もさるふれとさう用ひするを謙下さう
晋の代の王濟は馬をりぐんれどもをばらんとせしうの馬を中へ入ら
王濟云々をよの馬のこゝ錦の障泥の濡るを惜むあつとて障泥

○韓非子

をさうと後にもさうまはるる洛陽の都の地面よとの外へ赤皮
さうりぐ王濟の地面を廣くと買ふ馬場とありて錢を編む一
面と布はさう奢を極めるとぞ対の人この馬場とさう溝とヤルとこ
金の溝と云ふと

○唐書

齊の玉の桓公孤竹と不国を征伐して春のひの玉(おも)と冬ま
く齊の玉(おも)取りたまふとさう踏まひの玉(おも)齊の大夫を仲うを
馬の智慧を用ふとさう馬を放らぬ馬を春ま(おも)をさうとさう
後にはさう齊の玉(おも)とさう
唐の玄宗皇帝は舞をさう馬四百足ありとあれと二百を左右に連
誰か其の馬誰か其の傾りとさう名をけりて其舞の曲を傾蓋樂と云

く切馬とに錦や彼を二匹をさき連銀をさつと飾とちかひ樂
を始りればあまの馬を首をとり皮をとり堅くあまの櫛みりて
り終ればあまの馬の前不存伏せりてそ後安福山といふ謀反人が洛陽
の都を攻め玄宗を追い出さし切馬を數十匹奪ひたりて范陽と云所
へ攻りしが後安福山をめぐり田兼嗣といふあまの馬を得てそ終りに
切馬の聲ふたを聞きしがあまの酒宴を催して音ふそとまじりて
あ馬とれとぞと聲ひわたりれば殿のよの妖怪の所ありとぞこれを
殺ししとぞ

○史記

秦の始皇帝の子二世皇帝の所くは丞相の皮をとり趙高を怒り成た
とちまをさしあまの馬の皮をとり殺せりて謀つてま

○淮南子

是の鹿を引とく二世皇帝の馬を斃らるとアはれはそこの鹿がそれほ
鹿を二匹とふともありま趙高がむり多り人をも成死を馬とこ
さるとよふもあり趙高をくたれとたりて鹿とよふもを表面に
罪をせし追えりて殺ししとぞ
むり淮南の地は塞弱といふかきあり無家より飼の馬ありそ北隣カ
国の夷の地へ馳せりて汝らたりたり同一里人が公羽の馬を奪ひてを氣
の毒ありとりたれ公羽殺すといふはれが互つてさうありしれ
まをぬきて後三月にうりてそかの馬を夷国の各馬を引はれとてりり
里人が公羽の馬を奪ひてを氣をぬきて目とてりてと云れは公羽を
はれが互つて福ありとぞ知れりぬきて後公羽の馬を奪ひては

馬よりつゝ先づ内蔵馬して群の骨とてち抑たり里人より息子の怪
二匹を乳の毒と云れぬ病こそあれが及つて幸よくもなれぬと
云て後漢の始皇帝が万里の長城とて漢土の地と夷の地との境を
何千里も知らぬ外廓を築き置くとて百姓を多く人歩いとせぬ
とてその客を病と云て息子を伴輪ちりて人歩いとせぬ
なりなり人間万事冥途の馬となれり

○晋書

晋の惠帝の年号を天守といふと童のちり歌に土足の馬に江を
りしてつゝ一匹を龍と云ふと云ふやうなり後漢の年号のとき
天下を亂れし西陽王汝南王南越王彭越王瑯琊王といふ五人の王に
つゝ合戦ありたり瑯琊王をいふ天子と云ふと晋の中興といふ

たり文帝と云ふをこれなり

○前後書

漢の文帝のとき千里の名馬を致しやとてあり帝のよひは朕の外に
よりありぬと云ふとやの旗を兵の前になして外あり下下軍が
後く後くして千里の馬を致しやとてあり軍の討ちを三軍に
う定まると千里の馬を致しやとてあり朕は外に千里の馬
下り先一何方一才ふとてありの名馬とて遠くありとてあり
あり致すの馬を致しやとてあり召すこと朕は外に千里の馬
うけぬと清武の致すなりとてありとてありとてありとてあり
と千里の馬を致すこととてありとてありとてありとてあり

○同書

漢の武帝の元鼎四年に神馬とてありとてありとてありとてあり

あつと云ふし頸より大きくて頸のより一鬣と云脊骨弱くて腹の大き
るごと三鬣といふ頸のくく蹄の大きさと三鬣といふ鬣といふ弱く
後またぬるとく又頸大きくて耳の廣きハ一鬣あり頸長く
不折るるを二鬣あり上の短く下の長きを三鬣あり腹大きく腹乃
後子を四鬣あり脊骨をそく腰骨うをりて上鬣あり下鬣に違
馬あり上の三鬣五鬣を除くこと一を二を觀みし

○孔子の語

孔子の弟子の顔淵が云ふの問の城門よりあるの白馬を繫ぎて見く一
足の徳縮く一毛と云ふれれ孔子の傳せにあれ白馬ありて一毛が
馬のありぬる一足の長きをとりとつらむるをとり馬も絹
も正と云るなり

○韓非子

衛嗣君といふ人々云ふを馬を種を形しく鹿を似るるを馬馬ハ千金
よと云ふるに而馬を何内をもあれも鹿一足ハ一両と云ぬ何故
そるれハ馬を人の第一の用ひの畜を何の鹿をも役よと云ぬとい
るの更なりと

○武帝樂府

騏驎を千里の名馬有り塩依るとの雜物を積一車を受く唐坂
といふ坂といふを馬の目利する伯余り逢ひくと云ふりと嘶く
これハ伯余を名馬を名れも知るとるハ雜物を積一車を引せよ
と伯余り知るなり

○前漢書

騏驎もるるを馬馬と云ふるといふ壁のより千里の名馬もといハ
二年をく馬種ハ例ハ依ると長しと云れとも一兩の馬とはちい

たどりの自由を叶はせともよめかろうをむすの如く千四と一
千四と一とをなれとす

○前漢書

名馬を人の手よきもの種を絶せしむるをせしむるを
みくはちうまうの器量うまの切となすをせしむるをせしむる

○左氏傳

晋の悼公齊の馬を賜ふるも齊の靈公他はよと弁史と靈公
の太子支と云人の馬を追ひて剣を投じ馬の鞍をたがひ切る
之靈公もせむるも出奔をせしむるも齊の公と晋とをなれり
とるん宗

○後漢書

後漢の代の桓典を侍御史とて天子の例にまよの大臣とせしむる時

前漢の代の陸賈を丞相とせしむるも東向と勤めるもの勢ひは殊
の勢ひは殊れとも桓典を丞相とせしむるも東向と勤めるもの勢ひは殊
れとも追送せしむるも朝替をの馬はつて威を以てせしむるも
の都の今をなれとも出奔をせしむるも齊の公と晋とをなれり
とるん宗

○同書

後漢の張堪を支祿魚とて友とせしむるも支祿帝毎朝大臣と政事と
を弾一もよきもの種を絶せしむるをせしむるを
みくはちうまうの器量うまの切となすをせしむるをせしむる
とるん宗

み術はあつりく首は砕けく死しこれにる人あれをえく
るく又馬く人を名く大ををさるき一足み大く吠に日つて
ま〜二三間あときり追うけくるく馬かこく上静りよりく
大の近くまらるを飼くまらるは下踏あち〜る獸たりとも
智恵あるまらる人馬かまらるはとる

